

繰り返さないために、紡ぐ言葉。

－ハンセン病問題を考える－



こやながわ 小梁川 颯 さん（伊集院高校3年）

鹿児島市吉野町出身。中学生の時に上田先生の演劇を見て、伊集院高校への進学を決意する。

今回、「そのひとの名前」の主役をして、より当事者の気持ちに近づけたと思います。名前を奪われ、一人の人間として当たり前に生きる権利を奪われる。当事者と全く同じ気持ちになることはできませんが、その気持ちを理解し、セリフや仕草、表情などを通して全身全霊で伝えていければと思っています。

演じれば演じる程、この問題の大きさを強く感じるとともに、差別が「遠いものではない」と考えるようになりました。次の世代である自分たちが、このような問題を知り、また身近なことであることを演劇を通して伝えていきたいと思っています。

「分かったつもり」になっていった差別

ハンセン病をテーマとした演劇を作った一番のきっかけは、25年ほど前に星塚敬愛園の語り部の方からお話を伺ったことでした。「いつかは取り組みたいテーマ」と思いついていましたが、実際に書くには大きな覚悟が必要でした。描き方次第では観客に誤解を与える恐れがありました。当初は裁判の勝訴をクライマックスにすることも考えましたが、人間として「名前を奪われること」が差別の本質だと気づき、奪われた名前と「人間回復」への過程を描くストーリーへ方向転換しました。

執筆で最も意識したのは、問題の大きさをしっかりと受け止めつつも、単なる同情だけで終わるドラマには絶対にしないことでした。

語り部から演劇を通して次の世代に

ハンセン病問題を未来へ紡ぐため、伝聞だけでなく自ら行動し、様々な活動に取り組む人々がいます。どのような想いで活動しているのか、お聞きしました。

過去から未来へ 紡いでいく



「共に歩む会」の会員が園内の史跡を案内する様子。



6月20日、鹿屋市文化会館で「令和8年度ハンセン病問題啓発講演会」が開催され、伊集院高校演劇部によるハンセン病劇「そのひとの名前」が公演されました。

今後入所者の生の声を知る歴史を紡ぐ一員として、多くの世代に語りかけ、ハンセン病問題の全面解決に向けて取り組みます。

私たちは、元々「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の勝訴に向けて活動をする団体でした。平成13年の勝訴後、一度は解散の話も出ましたが、裁判が終わっても社会の根深い偏見・差別は解消されず、入所者の高齢化や療養所の将来、さらには家族や遺族の救済など、真の「全面解決」にはまだ多くの課題が残っていました。

入所者の生の声を
知る者の一人として



ちやえん りょういち 茶園 亮一 さん

NPO法人「ハンセン病問題の全面解決を目指して共に歩む会」理事長。入所者や自治会、市と連携して活動を行う。

この演劇を通して、「人間は同じ過ちを犯す可能性がある」ことを改めて認識してほしいです。当時、人権を無視した国の施策に多くの人が疑問を持たず従った背景には、病への無知や他人事にする態度がありました。近年でも、コロナ禍の感染者への理不尽な差別などが挙げられますが、ハンセン病問題のような事象は過去の出来事ではなく、現代でも起こりえます。この演劇が、その本質に気づくきっかけになれば幸いです。

今の私たちにも
決して他人事ではない



うへだ みわ 上田 美和 さん

伊集院高校の演劇部顧問。これまで各校で演劇脚本を手がけ、あきた総文2026の演劇部門で優秀賞を獲得。